

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2024年 6月 22日	
所属部局・学年	野生動物研究センター 保全福祉科学分科 M1
氏名	中村陽月

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本モンキーセンター
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
動物園科学実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2024年6月14日 ~ 2024年6月16日 (3日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
日本モンキーセンター、学術部、キュレーター、新宅勇太氏
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の動物園科学実習では、動物園の学術的・社会的意義や、動物園と来園者との関係性について学習した。学部生の頃に同等の内容を学習したことはあるが、実際に動物園に出向いてその裏側をこれほど重厚に堪能したのは今回が初めてである。スケジュールは以下の通りである。
6/14 午前：日本の霊長類学とモンキーセンターの歴史について 午後：園内の散策
6/15 午前：動物園の霊長類を用いた種間比較の研究 午後：標本実習
6/16 午前：飼育実習 午後：動物園教育
6/14 1日目の午前は日本の霊長類学とモンキーセンターの歴史について学習した。日本の霊長類学の発展の起点となった場所にいることを実感し、午後からの観察に期待を膨らませながら講義を聞いた。 午後からはモンキーセンター内の展示施設を順に訪れて観察した。私の印象に残っているエリアは、一般公開されていないスローロリスの飼育施設である。彼らの飼育施設は真っ暗なので、我々はヘッドライトをたよりに彼らの姿を観察した。一部のスペースは仕切りのガラスが撤去されており、下手をすれば脱走しかねないような環境であったが、スローロリスの生態を考慮して脱出できないような工夫がされていた。個人的には、来園者の目を引く斬新な飼育方法であると感じたが、スローロリスに容易に触れることさえできる状態であったため、一般公開できないの言うまでもない。また、「リスザルの島」のような本来の生息環境に似せた展示方法は、来園者に動物との本来の関わりを考えさせるためにも重要であると感じた。もちろん人に危害を加える動物についてそのような飼育方法を適用するのは言語道断であるが、慎重に種を選定すれば、完全な飼育下と本来の環境での観察のしやすさや行動の違いなどを計り知る契機となるだろう。
6/15 2日目の午前はモンキーセンター内で飼育されている霊長類数種類を対象に、それらの行動の種間比較を行なった。観察対象種は計8種であり、原猿類、旧世界ザル、新世界ザル、類人猿から2種ずつ選定した。我々の観察テーマは、「観察圧が動物に与える影響」であり、4人がそれぞれの分類群を担当し、観察を行なった。観察の流れは、10分の観察の後、7分のインターバルを挟んで再び10分観察するという作業であり、これを2種について行なった。私の担当は新世界ザルであった。1種目はクロミミマーモセットを観察した。元々警戒性が強い種のように、観察中は常にこちらに気を配って鳴き声を発したり、別の来園者を威嚇したりするような行動も見られた。観察が終盤に差し掛かると、目が合う頻度が減り次第に発声頻度も低下した。2回目の観察では観察者に近づきはするものの、発声は観察時間を通してわずか1回のみ記録された。2種目はフサオマキザルを観察した。この種は最初から観察者に興味を示さず、こちらを一瞥してすぐに採餌行動に移った。2回目の観察のときには既に採餌は終わっていたが、依然として

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

こちらを気にする様子はなく、観察圧の影響をほとんど受けていないことが示唆される。これらの実験から科学的に意味のあるデータが得られたわけではないが、「観察条件をより厳密に設計する」、「観察期間をより長く設ける」、「種をより慎重に選定する」などの条件の検討により、動物への観察圧の影響について意味のある結果が得られるのではないかと考えた。

午後からは標本実習を行なった。最初に解剖を行なう部屋へ行き、ニホンザルの死亡個体の解剖を見学した。死亡個体とはいえ、動物の皮を剥ぎ肉を切る一連の動作を見ていると少し気分が悪くなった。しかし、臓器の摘出や骨格標本の作成は動物園の主たる役割の1つである「標本の貯蔵」と密接に関係している作業であり、避けては通れない。慣れているとはいえ、一連の解剖作業を手際よく行なう姿に感服した。その後は標本貯蔵庫を見学し、普段は見られない貴重な資料の数々を見た。このような貴重なサンプルを研究に使用させていただくためにも、研究機関と動物園は親密な関係を築き上げることが非常に重要であると改めて実感した瞬間であった。最後に霊長類の骨格標本をパーツごとに分類し、自ら標本として記録するという体験を行なった。骨の一本一本についてどの部位であるかということを考える機会は初めてだったので非常に楽しめた。

6/16

3日目の午前は飼育実習であった。私はアジア館の担当で、餌のカットや飼育施設の掃除などを行なった。個人的に気になったのは餌の種類で、歯周病予防のためにできるだけ糖분을控えめにしているらしいのだが、どうも生のサツマイモを食べず加熱したサツマイモしか食べないというような種もいるらしく、全体で足並みを揃えて健康管理を行なうことはなかなか難しいことであるということがわかった。歯周病に関しては、サルの生態的特性上、個別の管理が難しく餌で管理するしかないというのが現状である。今後は社会性を持つサルに合った口腔健康管理方法が台頭することを願う。

午後は来園者が動物を観察するときどのような会話を行なうかを観察した。私はテナガザルの雲梯が設置してあるエリアで来園者を待つことにした。結論から言うと3組の来園者がテナガザルを観察した。それぞれの会話は、「動物の可愛さについて」、「暑さについての言及」、「説明書きへの言及」の3種類であった。これらは動物園側と来園者側が求めているもののギャップについての一般的な問題と関連しており、未だそのギャップは根深いということを感じた。動物園側は今まで以上に、人と動物の関わり方、動物園の社会的意義、来園者に期待することなどの事柄について積極的に啓発すべきであると感じた。



シロガオサキのモップくんを模した「モップくんカレー」



クロミミマーモセット

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



リスザル島のリスザル

6. その他 (特記事項など)